View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by GLIM IR Institution Repository

1

［報告｜report］

［2013年度入試説明会講演｜働きながらアーカイブズ学を学びませんか？――1］

アーカイブズ学専攻で学んだこと[1]

Let's Study Archival Science: From a Graduate ― 1

坂口貴弘｜Takahiro Sakaguchi

1 ―― はじめに

私は2008年4月、学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻（以下「専攻」）の博士後期課程に第1期生として入学しました。2011年に単位取得退学した後、京都大学大学文書館に就職し、京都大学の歴史に関する資料の受入れ、評価選別、目録データ整備、公開審査、レファレンスなど、アーキビストとしての職務に日々従事しております。ここでは、博士後期課程に在学していた者の立場から、大学院生活を振り返りつつ、専攻への入学を考えている皆さんに何らかのヒントとなるお話ができれば幸いです。

2 ―― 大学院入学まで

私は学部生の頃、大学史担当部署でのアルバイトなどを通じて、自らが在学する大学の歴史に関する資料の整理に関わった経験から、アーキビストとして現代の記録を次代に伝える仕事に携わりたいと思うようになりました。しかし、次第にこの職業をめぐる厳しい現実を知ることになります。

すなわち、日本には専門のアーキビスト養成機関といえるものは存在せず、アーカイブズ学を専門的に学んでからアーキビストになった方もほとんどいらっしゃらないのが当時の状況でした。また、アーキビストの公募採用はほとんど例がなく、地方自治体の文書館等でも、多くは学芸員、司書、学校教員、あるいは一般の公務員等からの転任者が職員となっているため、アーキビストになりたければまずこれらの職に就く方が早いかもしれない、ということでした。

とはいえ、私がアーキビストを志した頃は、ちょうど日本のアーカイブズをめぐる潮流が変わりつつあったように思います。2003年には『アーカイブズの科学』（柏書房）が刊行され、翌年には日本アーカイブズ学会が誕生しました。また、同じ2003年に内閣府に設けられた「歴史資料として重要な公文書等の適切な保存・利用等のための研究会」は、公文書管理制度の見直しにつながる端緒となったものであり、6年後の公文書管理法制定につながっています。このように、従来は限られた関係者の間でのみ知られていたアーカイブズという言葉とそれに関する研究、人材養成、法制度等をめぐる課題が次第に広く認識され、その改革が進みつつありました。このような時期にアーキビストへの道をスタートできたことは、とても幸運であったと感じています。

その後、大学院在学中よりいくつかの大学や研究機関等で資料整理のアルバイトなどを経験し、国文学研究資料館

アーカイブズ研究系（当時）で非常勤の研究員として勤務していましたが、2007年、日本で初めての本格的なアーカイブズ学の大学院課程が学習院大学に設置されるとのニュースに接しました。それまでも自分なりに試行錯誤しながらアーカイブズ学を勉強してきたつもりではありましたが、今後この分野の中心拠点の一つとなるであろうアーカイブズ学専攻で本格的に学びたいと考え、博士後期課程の入学試験を受けたところ、合格することができました。

なお、入試対策については、私たち1期生が入試を受けた時は、いわゆる「過去問」はなかったのですが、現在は数年分の過去問が学習院大学のアドミッション・センターで閲覧できます。また、応募書類には入学後の研究テーマについて記入する欄もあります。大学院の場合、限られた年数で一定レベルの研究論文を仕上げることが求められます。自らが勉強したいことと専攻で学べることが一致するのか、慎重に検討することが不可欠だと思います。入試説明会に参加し、あるいは専攻の先生方とコンタクトをとって一度相談されることをおすすめします。

3 —— 大学院生活について

3-1：授業

専攻の授業の大部分は平日の夕方か、土曜日に開講されます。そのうち、土曜日午後の「アーカイブズ学演習」（ゼミ）には、博士前期・後期を問わず専攻の院生全員が出席することになっています。そこでは主に、院生各自の研究計画や学位論文執筆計画についての報告と質疑応答が行われます。もっとも、ゼミでの報告が回ってくるのは1年に2回程度ですので、修士論文や博士論文の指導は、授業時間外に主査の先生方との個別面談の場で主に行われることになります。

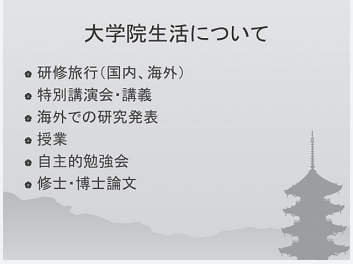
3-2：修士論文・博士論文

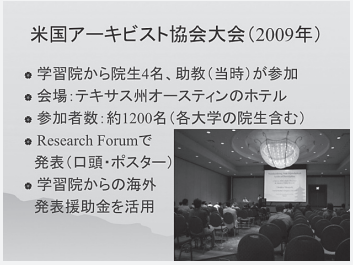
専攻を修了するには、所定の単位を修得するなどの他に、学位論文（修士論文・博士論文）の提出が必要です。修士論文については、6月頃の中間発表会、11月頃の最終報告会を経て、翌年1月初旬に提出というスケジュールになっています。

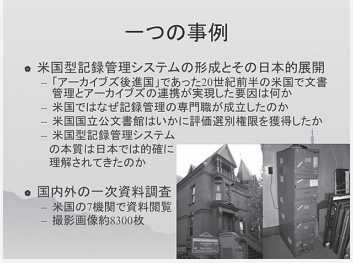
修士論文の執筆に際しては、研究テーマはできるだけ早めに絞り込むよう指導されていました。そのためにも、抽象論ではなく、具体的なアーカイブズ資料や機関といった研究素材を決め、その調査・分析に基づいて論を展開すべきことが強調されました。とはいっても、特定の資料や機関の個別事例を取り上げて事足れりとするのではなく、それらがアーカイブズ学全体の中でどのように位置づけられるのかを明確にした上で、分析・考察することが必要になります。

博士後期課程の場合は、単位取得退学者が3年以内に博士論文を提出し、口述試験に合格すれば、課程博士の学位を授与されることになっています。博士論文の提出締切は毎年9月末となっており、専攻では提出の約1年前に中間報告会、約4か月前に最終報告会が開催されます。私の場合、2013年9月に博士論文「米国型記録管理システムの形成とその日本的展開」を提出し、翌年2月の口述試験を経て、「博士（アーカイブズ学）」の学位をいただくことができました。

博士論文の執筆に際しては、研究の「独創性」「国際性」「応用性」という3つの要素を明確にすること、という指針が示されました。このうち独創性と国際性はアーカイブズ学への学術的貢献を意味し、必ず盛り込むべき要素ですが、応用性はアーカイブズ活動への実務的貢献にあたり、テーマによっては必ずしも該当しない場合もあります。私の場合、単位取得退学後に首都圏以外の地で就職したこともあり、主査の安藤正人先生の研究室にうかがって直接指導を受ける機会はあまり多くもてませんでしたが、最終段階では、論文







の1章分の草稿を書き上げるたびに電子メールで送信し、いただいたコメントをもとに修正をしていく、という作業を繰り返していきました。

論文の執筆は、アーキビストの実務とは異なる種類の努力を要する仕事です。先行研究を収集・分析し、研究対象と向き合い、独創性ある成果と考察を生み出すには一定の時間的余裕が求められるため、特に働きながら2年あるいは3年で学位論文を書き上げるのはやはり大変なことであると思います。とはいえ、周囲の環境や人的ネットワークを活用しながら、期限の定められたプロジェクトを計画的に遂行するという点では、他の仕事と共通する部分もあるかもしれません。実際、私も職場の仕事と博士論文執筆を同時並行で進めることで、時間の有効な使い方を学び、また研究と実務の双方に生かせる新たな視点をもつことができたように思います。

3-3：米国アーキビスト協会大会での発表

これは専攻の正規のプログラムではありませんでしたが、2009年には院生仲間や助教の先生と一緒に、米国アーキビスト協会（SAA）の年次大会（於・テキサス州オースティン）に参加し、研究発表を行いました。海外のアーカイブズ関係の学会等で研究成果を発表できる機会を探していたところ、毎年夏に1週間にわたり開催される米国アーキビスト協会の大会期間中、リサーチ・フォーラムというプログラムがあることを知りました。シンポジウムや分科会のように特定のテーマが定められているわけではなく、各発表者の研究成果を口頭発表やポスターの形で発表できる場で、米国国外からも参加できるようでした。

当初は1人で参加するつもりだったのですが、3人の院生仲間が関心をもってくれ、各人がリサーチ・フォーラムでの発表に応募した結果、幸いなことに全員が採択されました。また、助教（当時）の森本祥子先生に引率していただき、現地では前年に来日されたテキサス大学のD・グレイシー先生が歓迎して下さったおかげで、1人で参加した場合よりもはるかに楽しく充実した経験をすることができたと思います[2]。多様性の向上を標榜する米国アーキビスト協会にとっても、日本からの5名の参加者は珍しかったようで、私や他の院生たちの写真が、協会が発行する*Archival Outlook*誌の大会特集号（2009年9・10月号）に掲載されました。

米国アーキビスト協会の大会は約1200名（2009年の場合）が一堂に集う大規模なイベントで、世界のアーキビスト仲間の広がりを体感するとともに、米国のアーカイブズ学の水準を直接知る機会ともなりました。海外で研究発表をする院生に対しては、学習院大学から助成金も支給されます。専攻に入学された院生の皆さんには、ぜひとも在学中に世界のアーキビストと直接触れ合う機会を多くもっていただければと思います。

3-4：自主的勉強会

在学中は正規の科目履修とは別に、Archival Science Lab.（略称ASL）という名の自主的な勉強会をつくっていました。これは、当時の博士後期課程の院生や、他大学の院生なども含めた6名で、ほぼ月1回開催していたものです。専

攻では、博士前期課程と後期課程の間で履修できる科目にほとんど違いはないのですが、前期課程に比べて修了要件の単位数が少なく、既に各自の研究テーマをもっている後期課程の院生には、ゼミ等とは別に研究面で切磋琢磨できる場が必要だと感じていました。

そこで2009年の1月、土曜日のゼミ終了後に共同研究室を借りて、自分の研究テーマの発表や文献紹介・書評を行う会を始めました。勉強会の水準を維持すべく、メンバーを固定・限定して毎回参加を原則とし、2回に1回は必ず発表の順番が来るようにしました。日常の仕事などに追われる中で着実に研究を進めていくには、研究発表せざるを得ないような機会を自分に課していくことが効果的です。大学院とはただ受動的に講義を聞き、与えられた課題をこなすだけの場所ではありません。現在の専攻でもサブゼミ等の活動が行われているとのことですが[3]、このような院生同士の自主的・積極的な取り組みこそが、大学院での研究の成否を決定づける大きなカギとなるように思います。

4 ── さまざまな入学の動機

さて、アーカイブズ学専攻に入学することのメリットはいろいろ考えることができますが、ここでは端的に「就職できる」「キャリアアップできる」「研究できる」の3点を挙げてみたいと思います。

4-1：就職できる

いうまでもなく、専攻に入りさえすればアーキビストとしての就職が保証されているわけではありません。ただ、特にアーカイブズ関係の実務経験をもたない人がアーキビストになりたいと思った場合、専攻への入学はそのための一つの近道となることは間違いないでしょう。

近年、文書館等の職員を公募するにあたり、応募資格要件の中に「アーカイブズ学」という文言が含まれるケースが増えつつあります。私が気づいた範囲でも、国立公文書館、人事院、宮内庁書陵部、東京都公文書館、福岡共同公文書館、広島市、高松市、法政大学大原社会問題研究所が、歴史学など他の学問分野とともに、アーカイブズ学を学んだ人材を募集していました。このような求人はいまだ多いとはいえませんが、約10年前にアーキビストの就職口を探していた私にとっては、それでも隔世の感があります。学習院にアーカイブズ学専攻が開設され、この分野の人材を養成する教育課程ができたこと自体が、このような求人を増やしている一つの要因だと思います。

学習院大学のアーカイブズ学専攻は、アーカイブズ学を標榜する日本で唯一の大学院課程ですので、関係者の間で注目されていることは間違いありません。専攻の院生というだけで関心をもってもらえるのは、修了生が少ない今のうちだけです。各種の関係学会・研究会や調査会などに積極的に出かけていき、懇親会で名刺を交換すれば、きっと顔と名前を覚えてもらえるでしょう。専攻の看板を利用できる間に利用して人的ネットワークを広げていくことが、アーキビストへの道を切り拓いていくはずです。

さらに、専攻に寄せられるアーカイブズ関連の求人情報は専攻用の掲示板に貼られており、これらの情報が入手しやすい環境であることは確かです。また、ご存じのとおり、専攻の単位を履修することで、日本アーカイブズ学会登録アーキビストの認定を取得しやすくなることも、就職のための武器となるかもしれません。

4-2：キャリアアップできる

既にアーカイブズ関係の仕事に就いているが、さらにキャリアアップしたいという人にも、専攻は格好のチャンスを提供してくれます。社会人が大学院に入ることで得られる成果の一つは、新たな人脈であると思います。専攻の先生方や講師の方々、実習先などでお世話になる方々、そして院生の仲間たちとのかけがえのないつながりは、現在の仕事を進めていく際にも、さらに転職やキャリアアップを目指す場合にも、大きな力になっていくでしょう。

そもそも、他のアーカイブズ機関の内部で2週間も実習したり、海外のアーカイブズ機関を見学したりという機会は、通常の仕事をしているだけではまず経験できないものです。また、他機関の調査や関係者への詳細なインタビューなども、学位論文執筆のためという大義名分があれば、受け入れてもらえる可能性が高まるでしょう。これらの経験や専攻の講義を通じて得た人脈と知識は、専門職としてきちんと評価されるアーキビストを目指すには欠かせないものだと思います。加えて、修士や博士の学位がとれること、日本アーカイブズ学会登録アーキビストの認定を受けやすくなることも、キャリアアップのために有効でしょう。

4-3：研究できる

アーカイブズ学の道を究めたい、あるいはこれまでの研究や経験をまとめ発展させていきたいという方にも、専攻はもちろ

ん役立ちます。

研究というものは、どうしても孤独に自分自身と向き合わなければならない要素がありますが、それをサポートしてくれる様々な環境が、研究を成功させる上で欠かせない要素であることも事実です。例えば奨学金、留学の機会、文献資料、研究仲間です。

専攻には院生のための様々な研究助成制度が用意されており、経済的負担を軽減できるとともに、研究資料の購入や調査旅費などに充てることができます。また、国内外での研修旅行への参加に際しても、院生の負担額は低廉に抑えられています。また、専攻は韓国の明知大学校やベトナム国立大学との学術交流協定を締結しており、希望するならば海外の大学でアーカイブズ学の研究を深めることができるでしょう。

また、アーカイブズ学関係の図書・雑誌の充実については特筆しなければなりません。伝統ある他の学問分野に比べれば、アーカイブズ学関連の研究書や論文はいまだ多くはありませんが、海外のものや類縁分野も含めれば、参照されるべき先行研究の蓄積は相当にあることも確かです。ただ、国内の大学には本格的なアーカイブズ学の大学院課程が長く設置されていなかったこともあり、この分野の文献を豊富に所蔵する図書館はほとんどありませんでした。専攻の閲覧室・書庫では、諸外国のアーカイブズ学関連雑誌や国内外のアーカイブズ機関刊行物のバックナンバーから最新号までが揃っており、和書・洋書とともに院生は自由に閲覧できるようになっています。また、電子ジャーナル化された雑誌（*Archival Science* 誌、*Records Management Journal* 誌など）の論文については、大学の情報システムにログインすれば無料でダウンロードすることが可能です。

最良の「研究環境」は、何といっても専攻の先生方、先輩・同級生・後輩の存在でしょう。アーカイブズへの理解、特にアーカイブズ学という学問分野に対する理解がまだまだ広く浸透していない中で、アーカイブズへの思いを共有できる人々と深い議論を交わし、鋭い指摘を受け、切磋琢磨することは何よりの貴重な経験となるはずです。自分の研究を他人に説明してみることで自身の理解がクリアになり、今までの思い込みが独り善がりなものであったことに気づく場合もあります。数多くの授業課題や仕事との両立は困難も多いですが、落ち込むことがあっても励ましあう中で、修了後につながる人間関係ができることこそ、大学院で学ぶことの最大のメリットではないでしょうか。

5 —— おわりに

そもそも専門職とは、一面からみれば、人任せではなく自分自身で勉強をし、自分の頭で考え、自分で決断を下していくことができる人のことではないでしょうか。専門職としてのアーキビストの一人一人には、仕事をする中で様々な課題に直面したときに、単に慣れ親しんだやり方だからとか、他所でこうしているからとかではなく、より望ましい解決法とは何か、ありとあらゆる手段を用いて調査し、分析し、検討する姿勢が求められます。

特に、アーカイブズに関する理論と方法論の蓄積が浅く、頼るべき先例も多くない現在の日本においては、それはなおさら不可欠な能力です。幸か不幸か、『これさえ読めばあなたも今日からアーキビスト』とか『猿でもわかるアーカイブズ』というような便利な本は存在しません。

アーキビストの養成が、専門学校やオン・ザ・ジョブ・トレーニングではなく、大学院で行われることの意義の一つは、将来アーキビストとして働く中でぶつかる数々の難問を、自ら主体的に学ぶことによって解決していける力をつけることにあるのではないでしょうか。大学院の講義も、授業での発表やレポートも、実習を受けることも、学位論文を書くこともすべて、最終的には自分でアーカイブズ学の調査や分析ができるようになるための練習であり、トレーニングなのだろうと思います。

日本にはもっと多くのアーキビストが必要です。アーカイブズ学専攻のOBの一人として、実力ある本格派のアーキビストが、この目白の杜から陸続と巣立っていくことを念願しております。

1 —— この報告は、2013年10月26日（土）に開催された入試説明会に伴う講演会「働きながらアーカイブズ学を学びませんか？ ——アーキビストを目指して」の記録である。なお、部分的に加筆修正した。報告者は2011年3月に博士後期課程を単位取得退学し、2014年3月に博士（アーカイブズ学）の学位を取得。

2 —— この大会については以下の2本の報告も参照されたい。清水惠枝「アメリカンアーキビスト協会2009年大会参加記」、『記録と史料』20号、2010年、53-59頁。森本祥子「これからのアーキビスト養成の課題についての一考察：アメリカの現状をふまえて」、『学習院大学文学部研究年報』vol. 56、2010年、227-246頁

3 —— 橋本陽「2012-2013年度自主ゼミ活動報告」、『GCAS Report』Vol. 3、2014年、104-106頁